

福井大学附属図書館所蔵の古典籍(11)

『^{くふうしんわ}颶風新話』——大野藩の洋学者が翻訳した航海術書——

国際センター准教授 膽 吹 覚

いぶき・さとる



第1冊の扉と角葉(方位板)2枚

「^{くふう}颶風」とは、台風などの暴風のことである。『颶風新話』は暴風に関する知識とそれに対応するための航海術を述べた書物である。本書はオランダ人 S.van Delden がオランダ語に翻訳した『Gesprekken over orkanen』—その原書はイギリス人 Henry Piddington の著書—を原書として、日本の越前国大野藩の洋学者であった伊藤慎蔵が日本語に重訳したものである。

本学総合図書館郷土資料室所蔵の『颶風新話』

(H023-ITO-1・2) は半紙本の版本である。2巻2冊。2冊ともに題簽が剥離していることが惜しまれるが、^{はなだ}縹色唐草繫模様の表紙に光沢のある^{みる}海松色の^{かじ}角裂を付した瀟洒な装丁である。

内題は「颶風新話」。第1冊巻頭に「颶風新話序」(安政4年5月、杉田成卿)、「颶風新話序」(安政3年11月、緒方洪庵)の2篇の序文を置き、その後に「颶風新話凡例」(伊藤慎蔵)、「颶風新話目録」を収める。本文は四周単辺無界、半丁10行。本文は漢字

ひらがな交じり文(ただし、外来語はカタカナ表記)。版心は白口単黒魚尾に「颶風新話／第一回(回数)一(丁数)／槌鈍軒蔵」。上巻88丁、下巻94丁。下巻末尾に「颶風新話跋」(安政4年5月、内山良隆)を置く。下巻末に刊記はなく、上下ともに後表紙見返しは白紙である。印記は「大野藩洋学館図書章」「稟準刊行」「高嶋文庫」「福井大学図書之印」の4種である。

本書第1冊第1丁の扉(洋書のTitle-pageに相当する)は薄紅色の紙で、四周双辺の枠内に「緒方章公裁閱・伊藤慎君独訳 全部二冊／颶風新話 図並角葉 附刻／大野 槌鈍軒蔵梓」と記されている。

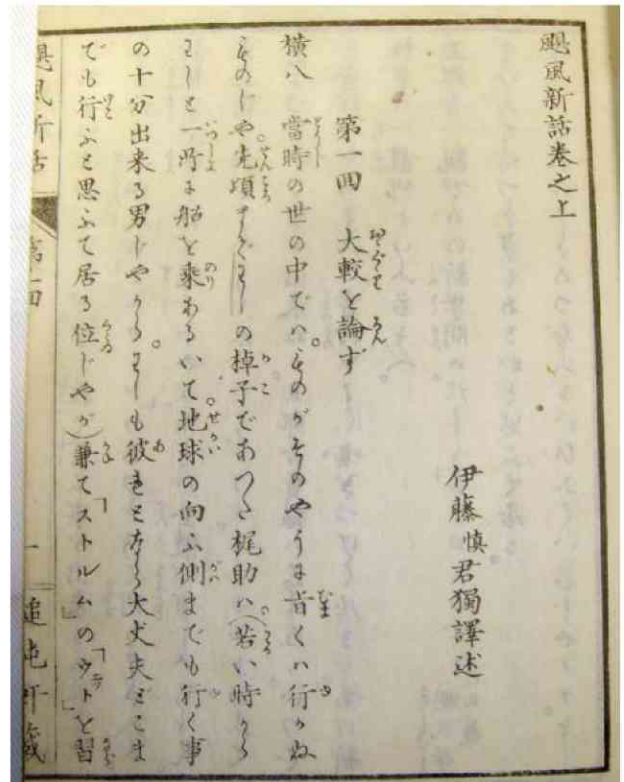
校閲者の緒方章は、江戸後期の蘭学者、緒方洪庵である。洪庵の諱は章、字は公裁といい、洪庵はその号である。洪庵は大坂に蘭学塾、適々齋塾を開き、医業の傍らに蘭学を教授した。彼は牛痘種痘の普及に尽くし、安政5年(1858)のコレラの大流行には治療に奔走した。

翻訳者、伊東慎蔵は長門国(山口県)萩に生まれ、大坂に出て、洪庵の適々齋塾で学んだ人である。安政2年(1855)、師洪庵の推挙により越前国大野藩藩校に赴任し、翌3年(1856)5月に創設された洋学館の初代教授となる。

扉に記された「角葉」は方位板のことである。本書には北半球用と南半球用の2種の航海用の方位板が付録されており(写真参照)、上巻表紙見返しの小袋に収納されている。こうした付録品が揃っていることも書痴には嬉しい。

本書は扉と版心に「槌鈍軒蔵」とあるので、その版元は訳者である伊藤慎蔵の伊藤家であったことが知られる。槌鈍軒は慎蔵の号である。『颶風新話』が刊行された同じ年に、大野藩は『英吉利文典』を出版しているが、こちらは「大野文庫蔵版」と記されており、その蔵版者は大野藩である。

近世の和本の版本であれば、その巻末或いは後表紙見返しに刊記または奥書を置くことが一般的である。しかし、上述の通り、本書にはそれがない。その代わりに本書の扉の欄外上部に「安政四年六月新



鑄」と記載されている。安政4年は1857年である。書物の扉に書名や筆署名、出版年月、出版社名を記載する方法は、洋本では一般的である。『颶風新話』は和本であるが、原書とした蘭書の装丁の影響を受けて、出版年をその扉に記載したのであろう。

大野藩は小藩であったが、藩主を中心に洋学が興隆し、越前国内はもとより加賀国大聖寺や美濃国赤坂、丹後国宮津などから多くの学生が訪れたという。当時の大野藩は財政が逼迫し、その打開策として、蝦夷地開発と海上貿易に活路を見出そうとしていた。大野藩は山間地にあったが、九頭龍川を下って日本海に通じていたのである。航海術を扱った『颶風新話』の翻訳・出版も、こうした大野藩の政策のもとで行われたものと考えられる。

大野藩の洋学については、岩治勇一「大野藩における洋学教育について」(第8回蘭学資料研究会大野大会特別講演、昭和41年)が詳しい。また、大野藩藩校旧蔵本は現在では福井県立大野高校に移管されており、それは『大野藩等旧蔵図書目録』(昭和55年)として報告されている。